

で当院内科に入院。昭和48年よりかなり強い気管支喘息で加療をうけている。入院時は貧血はなく、腹部単純撮影で著明な小腸ガス像を認めた。保存的治療にて腸閉塞症状は軽減し、喘息の安定を待って待期手術とした。経口バリウム検査で下部小腸の著明な狭窄を認め、9月28日手術。パウヒン弁を温存し終末回腸約50cm切除して端々吻合を施行した。切除標本は、肉眼的に3ヶ所中で中～高度狭窄がみられ、この狭窄部に一致しUI-Ⅱ～Ⅲの潰瘍が認められた。組織学的にも放射線腸炎と診断された。術後、経過は良好である。

24) 嵌頓ヘルニア手術症例の検討

山岸 逸郎・高野 征雄	(秋田赤十字病院) (外科)
工藤 進英・三浦 宏二	
榊原 清・飯沼 泰史	
大川 彰・吉村 孝夫	

嵌頓ヘルニアは治療が遅れると腸壊死に陥り、重篤となる危険の高い疾患である。今回、当院で経験した嵌頓ヘルニア症例につき、検討したので報告する。

過去10年間に当院で経験した嵌頓ヘルニア症例は20例(鼠径ヘルニア7例、大腿ヘルニア8例、腹壁癒痕ヘルニア4例、閉鎖孔ヘルニア1例)で、ヘルニア全体の6.5%であった。鼠径ヘルニアは全例男性であり、他は全例女性であった。鼠径ヘルニアに比し、大腿ヘルニア、腹壁癒痕ヘルニアは嵌頓率、腸切除率とも高値を示し、前者に比して後二者は嵌頓しやすく、かつ腸壊死に陥りやすいと考えられた。また、大腿ヘルニアは嵌頓例が非嵌頓例に比して有意に高齢であり、高齢者ほど嵌頓しやすいと考えられた。

嵌頓ヘルニアは高齢の大腿ヘルニア、腹壁癒痕ヘルニアに多く、かつ腸壊死に陥りやすいことから、早期診断と早期治療が必要であると考えられた。

25) long intestinal tube (イレウス管) の使用経験

大川 彰・高野 征雄	(秋田赤十字病院) (外科)
工藤 進英・三浦 宏二	
榊原 清・飯沼 泰史	
山岸 逸郎・吉村 孝夫	

現在、イレウスの治療方法として long intestinal tube (以下イレウス管) が広く使用されており、その有用性も多く報告されている。我々も昭和61年よりイレウスに対して積極的にイレウス管を用いている。今回、治療例27例について検討したので若干の考察を加え報告する。

27例中男性19例、女性8例で、平均年齢は 64.8±9.4

才であった。26例に過去に手術の既往を認め、その内容は胃癌12例、直腸癌6例、子宮筋腫3例、その他5例であった。イレウス管による寛解例は17例(63%)、その平均留置期間は7.8±4.2日であった。非寛解例は10例(37%)であり、その平均留置期間は4.5±3.0日であった。非寛解例の全例に手術が施行されたが4例が悪性腫瘍の再発、3例が絞扼性イレウスであり、癒着性イレウスのみの寛解率は20例中17例で85%であった。

イレウス管は、開腹術後の癒着性イレウスの初期治療として有効であると考えられた。

26) 腸管平滑筋移植を付加した Continent stoma の試み

新井 英樹・坂本 隆	(富山医科薬科大学) (第二外科)
大上 英夫・勝山 新弥	
竹森 繁・笠木 徳三	
鈴木 康将・永瀬 敏明	
田沢 賢次・藤巻 雅夫	

永久人工肛門を造設された患者にとって自制可能な continent stoma があれば、精神的な負担も軽く社会復帰も容易となろう。この理想を求め、平滑筋の特性を利用し、我々は、5年前より自己腸管の平滑筋を移植した人工肛門造設術を積極的に施行してきた。これまで遊離移植例29例、有茎移植例4例の33例に行なった。内圧検査では移植部に一致した昇圧帯を認め、注腸検査では、バリウムの排泄が抑制される傾向にあった。剖検例においては、平滑筋組織及び神経叢の残存が認められた。アンケート調査では、洗腸療法を行なっている症例もあるもののほぼ満足すべき結果であった。動物実験において血流、組織検査、筋電図を測定した結果、平滑筋の viability, myogenic contraction を認めている。

これまでの経験から有用な方法と思われるが、さらに長期の観察が必要である。

27) 当科外来における大腸内視鏡症例の検討

荒木智恵子・小田 幸夫	(済生会三條病院) (外科)
高桑 一喜	
富山 勝義	

1986年4月から1988年11月までの2年7ヵ月間に新潟県済生会三條病院外科外来に、肛門出血、血便、肛門痛、腹痛などで受診した患者のうちで大腸内視鏡検査を施行した155症例中、55症例、35.5%に所見を認め、うち5症例3.2%に癌腫をみとめた。

また、1988年2月より最近話題の非吸収性、非分泌性特殊組成電解質液(Golytely)を大腸内視鏡検査の前処